

【論文】

複数の助動詞に主語が後続する倒置文*

木村宣美

0. はじめに

Huddleston and Pullum (2002: 1107) では、複数の助動詞を伴う倒置文 (2a) の特性に関して、(1) – (3) に基づき、i) 主語が文末に後置される (subject-postposing: SP) 現象及び ii) 主語と助動詞の倒置 (subject-auxiliary inversion: SAI) が関わる現象との類似性があることが指摘されている。この点を、(1–3) を例にとり、考えてみることにする。

(1) It is no more expensive than the system you are proposing *would be*.

(2) a. It is no more expensive than *would be* the system you are proposing.

b. *It is no more expensive than *would* the system you are proposing *be*.

(Huddleston and Pullum 2002: 1107)

(3) a. He works harder than his father *works*.

b. *He works harder than *works* his father. (Huddleston and Pullum 2002: 1107)

この倒置文は、(2a) から明らかのように、主語が複数の助動詞 *would be* の後に生じることが許される一方で、(2b) のように、主語と助動詞の倒置 (SAI) が適用されて、主語が最初の助動詞 *would* のみと倒置することは許されない。その一方で、SAI が関わる現象ではないかと思わせる現象に、(3b) で示されているように、主語と語彙的動詞 (lexical verbs) との倒置は許されないという現象がある。このように、(1–3) に基づき、Huddleston and Pullum (2002) では、主語が文末にあることから、主語の後置 (SP) との類似性があると同時に、主語と助動詞の倒置 (SAI) との類似性もあるとの指摘がなされているのみで、(1–3) の文法性の違いに対して、明確な説明が与えられていない。すなわち、SAI が関わる倒置文と SAI とは異なる仕組みが関わる複数の助動詞を伴う倒置文の特性

* 本稿は、名古屋言語学研究会(愛知工業大学自由ヶ丘キャンパス, 令和5年3月18日)で口頭発表した内容に加筆修正を施したものである。1993年度-1994年度に米国マサチューセッツ州ケンブリッジでともに学んだ、研究会会員の阿部幸一氏(愛知工業大学)、星宏人氏(秋田大学)、西岡宣明氏(九州大学)及び研究会に参加され、質問あるいはコメントをいただいた方々に感謝申し上げます。なお、本稿では、助動詞(時に動詞)は斜字体で表記し、主語には下線を引き、前置された句あるいは主語に後続する句は太字体で表記する。本研究は、令和2年度-令和5年度日本学術振興会科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)((基盤研究(C)研究課題「2種類の助動詞倒置文の基底構造と派生メカニズムの解明」(課題番号 20K00656))に基づく研究成果の一部である。

を捉えることができていないということができる。

本稿の目的は、SAIが派生に関わらない倒置文、すなわち、複数の助動詞に主語が後続する倒置文の特性を、網羅的に調査することにある。本稿では、SAIでは導くことが難しい倒置文、すなわち、複数の助動詞を伴う倒置文を考察の対象としている研究のうちで、Culicover and Winkler (2008)の観察と分析を概観し、Emonds 1976, Wood 2008, Kim 2010, Park 2012, Brueing 2015, LaCara 2015, Honda 2022の分析との比較を通じて、複数の助動詞を伴う倒置文 (2a) の特性は、(4)として、まとめることができることを指摘する。

- (4) a. 主語が複数の助動詞に後続するとき、主語には対照強勢が置かれる。
- b. 複数の助動詞に後続する主語は、動詞句内にある。
- c. 主語に後続する位置に動詞句あるいはその一部が生じることがあり、動詞句削除の適用は義務的ではない。

(4a) から、旧情報を担う代名詞が複数の助動詞に後続する位置に生じることではなく、(4b) から、複数の助動詞に後続する主語は、通常の主語位置 Spec TP や重名詞句転移や外置が適用されて TP に付加された位置にあるのではないということになる。

1. 複数の助動詞に主語が後続する倒置文の特性

1.1. Emonds (1976) : SAIの特異性

Emonds (1976: 24) では、補文標識 *as* や *than* で導かれる比較節において、SAIが比較的自由に適用可能であることが指摘され、構造保持制約 (structure-preserving constraint)¹ の観点で、SAIはルート変形 (root transformation) なので、SAIが適用される比較節はルート文 (root Sentence: root S) としての資格を有する文でなければならないということになる。しかしながら、Sに直接支配されるルート文においてのみ、SAI等の主節現象 (main clause phenomena) が通常観察されることから、比較節というルート文ではない環境で、比較的自由に倒置が行われることには問題があることにな

¹ (i) **Structure-Preserving Constraint:** Major grammatical transformational operations are either root or structure-preserving operations. (Emonds 1976: 5)

(ii) a. **Root Transformation:** A transformation (or a transformational operation, in the case of a transformation performing several operations) that moves, copies, or inserts a node C into a position in which C is immediately dominated by a root S in derived structure is a “root transformation” (or a root transformational operation).

b. **Structure-Preserving Transformation:** A transformation (or a transformational operation, in the case of a transformation performing several operations) that introduces or substitutes a constituent C into a position in a phrase marker held by a node C is called “structure-preserving.” (Emonds 1976: 3)

(iii) **Root Sentence:** A root S (“sentence”) is an S that is not dominated by a node other than S. (Emonds 1976: 2)

る。倒置がルート文ではない環境で適用されることが指摘され、SAIとは異なる仕組みが関わる倒置文が存在する可能性が Emonds (1976: 24) で指摘されている。この点を、次の (5-6) で考えてみることにする。

- (5) a. We saw the same man as *did* John.
b. She spoke more convincingly than *did* Harry.
(6) a. *I hope you found the play more interesting than *did* we.
b. *Our friends can't afford to buy records as often as *can* you. (Emonds 1976: 24)

(6) から明らかのように、主語が代名詞である時、倒置が許されない場合がある。(cf. Culicover and Levine 2001) (5) と (b) の文法性の違いから、(6a) の主語が *we* で、(6b) の主語が *you* であることが、倒置が許されない原因である。この現象には疑問文等で適用される SAI とは全く異なる仕組みが関わっている可能性がある。というのは、主語が代名詞であったとしても、SAI が適用されないことはないからである。

第二に、Emonds (1976: 24) によれば、SAI の適用は義務的 (obligatory) であるのに対して、比較節内で観察される SAI は適用されることもあれば適用されないこともあり、随意的 (optional) である。²

- (7) a. We saw the same man as John *did*.
b. She spoke more convincingly than Harry *did*. (Emonds 1976: 24)

(5) と (7) から、比較節内における SAI の適用は随意的であることがわかる。(cf. Culicover and Winkler 2008) (7) は SAI が適用されていない通常の語順の文であり、(5) では、(6) とは異なり、主語は名詞句であり、SAI が適用されている。Emonds (1976) が提案する構造保持制約にとって問題となりえる現象、すなわち、ルート文とは考えることができない比較節内での倒置に関する詳細な分析は示されておらず、単に事実が指摘されるにとどまっている。倒置文で適用される SAI の特性を詳細に観察し、倒置に関する具体的な分析を提案する必要があるように思われる。

² 名古屋言語学研究会参加者から、(5) と (7) は異なる特性を有する構文なので、随意的であるとの Emonds (1976) の分析には問題があるとのコメントをいただいた。(5) と (7) は、例えば、Culicover and Winkler (2008) によれば、まったく異なる特性を有する構文である。随意的な関係にある構文であるという分析には問題があることになる。

1.2. Culicover and Winkler (2008) : 複数の助動詞が主語に後続する比較倒置文

Culicover and Winkler (2008) では, (8b) のような倒置がされていない通常の比較節とは全く異なる特性を有する比較倒置文 (Comparative inversion: CI) (8a) に対する詳細な分析が提案されている。

(8) Sandy is much smarter than $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. } \underline{\text{is the professor}} \\ \text{b. } \underline{\text{the professor is}} \end{array} \right\}$. (Culicover and Winkler 2008: 626)

まず第一に, Culicover and Winkler (2008) によれば, (8a) のような比較倒置文 (CI) は SAI が適用されて導かれることはない。というのは, 比較倒置文 (CI) の主語が複数の助動詞 (a verb cluster) に後続するからである。動詞句が削除されている (9) では than Modal have NP という記号連鎖に, 述語が削除されている (10) では than have been NP という記号連鎖に, 主語が後続している。^{3, 4}

(9) a. Interesting that his positioning, facing out of the frame but looking back into it, seems to make the portrait at once more candid and more dignified [than would have any of the alternative 'CONVENTIONAL' compositions].

b. They argue that they produced more readable and better researched reviews and editorials [than could have the academics under whose NAMES the papers appeared].

(Culicover and Winkler 2008: 629)

(10)a. But Mokotow was much further from the City Center [than had been the OLD town] and the evacuation under the German lines all the more perilous.

b. Some ranchers still permitted the military to use their property, though the vehicles were far more destructive to the land [than had been the soldiers on HORSEBACK].

(Culicover and Winkler 2008: 629–630)

Culicover and Winkler (2008) では, (9–10) の conventional, names, old, horseback に焦点 (focus) が置かれることを示す表記が採用されている。主語に焦点が置かれるという Culicover and Winkler (2008) の指摘は, 代名詞が生じる時, SAI が適用できないことを指摘した Emonds (1976) の観察に考察を加える時, 興味深い。⁵ 代名詞には通常焦点が置かれられないということが, 倒置の適用が阻止される

³ 述語が削除されている記号連鎖 than might/would be NP; than would/might have been NP が含まれるデータに関しては, Culicover and Winkler (2008: 630) を参照。

⁴ Culicover and Winkler (2008) に倣い, 強勢が置かれる語は, 大文字で表記する。

⁵ Emonds (1976: 24) が, SAI とは異なる仕組みが関わっていることを示す文 (6) には複数の助動詞が含まれてはいないが, 単一の助動詞が含まれる倒置文であっても, 複数の助動詞が含まれる倒置文と同様の特性を有する場合があると本稿では仮定している。

要因であると考えることができる。

主語に焦点が置かれなければならないという点に関連して、Culicover and Winkler (2008: 644) は、比較倒置文の主語は対照強勢 (contrastive focus) が付与される名詞句である必要があり、助動詞に強勢が置かれることはないということを指摘している。

- (11) a. Anna_i ran much faster than *SHOULD have* *she_i/*SHE_j/*someone.
 b. Bill Clinton_i said more than *could have* the PRESIDENT_j.
 c. *Bill Clinton_i said more than *COULD have* the president_i. (Culicover and Winkler 2008: 644)

(11a, 11c) では、主語ではなく助動詞に対照強勢が置かれ、非文法的である。代名詞に強勢を置くことで文法性が変わるという現象も起こらない。(11b) は、複数の助動詞に後続する位置に、主節の主語とは指示対象が異なる主語が生じ、対照強勢が置かれることで、文法的となっている。

Culicover and Winkler (2008: 651–652) では、Culicover and Levine (2001) と同様に、2種類の倒置文が存在することを主張し、代名詞にSAIの適用が許される場合と許されない場合とに分類している。代名詞にSAIの適用が許されない場合とは、複数の助動詞が主語に後続する倒置文であり、比較的重い主語 (heavy subject) に焦点が置かれる倒置文であるとの分析が提案されている。(12) は so 倒置文で、(13) は as 倒置文であるという違いはあるが、i) 複数の助動詞に重い主語が後続する倒置文と ii) SAIの適用が許される倒置文という2種類の異なる倒置文が存在することを示している。

- (12) a. Leslie had been there, and so $\left\{ \begin{array}{l} \text{had } \underline{I} \\ *had \text{ been } \underline{I} \end{array} \right\}$.
 b. Leslie had been there, and so $\left\{ \begin{array}{l} \text{had } \underline{Sandy} \\ \text{had been } \underline{Sandy} \end{array} \right\}$. (Culicover and Winkler 2008: 651)

- (13) a. Sandy has been very angry, as $\left\{ \begin{array}{l} \text{has } \left\{ \begin{array}{l} \underline{Leslie} \\ \underline{HE} \end{array} \right\} \\ \text{has been } \left\{ \begin{array}{l} \underline{Leslie} \\ * \underline{HE} \end{array} \right\} \end{array} \right\}$.
 b. Sandy would have been very angry, as $\left\{ \begin{array}{l} \text{would } \left\{ \begin{array}{l} \underline{Leslie} \\ \underline{HE} \end{array} \right\} \\ \text{would have } \left\{ \begin{array}{l} \underline{Leslie} \\ * \underline{HE} \end{array} \right\} \\ \text{would have been } \left\{ \begin{array}{l} \underline{Leslie} \\ * \underline{HE} \end{array} \right\} \end{array} \right\}$.
 (Culicover and Winkler 2008: 652)

(12a, b) の上段の倒置文が、主語が代名詞であっても SAI の適用が許されることから、通常の倒置文で、下段の倒置文が複数の助動詞に主語が後続する倒置文であり、焦点が置かれなければならない倒置文なので、代名詞主語は許容されないことがわかる。(13a, b, c) も、基本的には同じ特性を示している。すなわち、複数の助動詞に主語が後続する倒置文は主語に強勢が置かれることが求められ、代名詞主語が生じることは許されない。上段の倒置文は SAI の適用が許されることから、通常の倒置文であることがわかる。この倒置文では主語が代名詞であっても問題が生じることはない。Culicover and Winkler (2008) の観察に基づき、複数の助動詞に主語が後続する倒置文では、主語に対照強勢が置かれなければならないという特性があることがわかる。

第二に、Culicover and Winkler (2008: 631) では、複数の助動詞に主語が後続する倒置文の主語は、動詞句内にあり、主語が後置されて導かれるわけではないことが指摘されている。⁶ この点を、主語の後置が関わっていないことを示す (14–15) を例に取り、考えてみることにする。

(14)a. Sandy made more money in 2001 than *did* { Leslie
any of the other students } in 2002.

b. *Sandy made more money in 2001 than *did* in 2002

{ Leslie
any of the other students } .

(15)a. Sandy ate more cookies at the party than *did* { Leslie
any of the other students } , slices of cake.

b. *Sandy ate more cookies at the party than *did* slices of cake,

{ Leslie
any of the other students } . (Culicover and Winkler 2008: 634)

(14a) が文法的で、(14b) が非文法的であることから、倒置文の主語は文に支配されているのではなく、動詞句内にあることがわかる。すなわち、時を表す副詞句 in 2002 との生起する順番から、主語が後置されたとすると、時を表す in 2002 に主語が後続する (14b) が文法的な文となるはずであるが、実際は非文法的である。(14a) から明らかのように、動詞句内にある in 2002 に主語が先行する場合は文法的である。(15) も同様である。(15) で問題とされているのは、主語と目的語の順番である。主語が後置されたとするならば、目的語 slices of cake に後続する位置に主語が生じることが期待されるが、(15b) から明らかのように、非文法的であり、許容されない。(15a) で示されているように、許容されるのは、主語に目的語が後続する順番である。(14–15) が示していることは、複

⁶ 主語が動詞句内にあることを示す、寄生空所 (parasitic gaps), 多重 WH 疑問文 (multiple *wh*-questions), 擬似空所化 (pseudogapping) に関する詳細な議論に関しては、Culicover and Winkler (2008: 631–635) を参照のこと。

数の助動詞に主語が後続する倒置文において、主語は動詞句内にあるということである。Culicover and Winkler (2008) の観察に基づき、複数の助動詞に主語が後続する倒置文では、主語は動詞句内にあると仮定する必要がある。

第三に、Culicover and Winkler (2008: 628) では、動詞句削除が義務的であると分析する Merchant (2003) の分析の問題点を指摘し、必ず削除されなければならないわけではないと主張する。Merchant (2003) は、(16) のような文を例に取り、倒置文において、動詞句削除は必ず適用されなければならないと主張する。

(16)a. Sandy will run faster than Kim will (run).

b. Sandy will run faster than *will Kim* (*run). (Culicover and Winkler 2008: 628)

(16b) は、*than* 節内の動詞 *run* が削除されない場合には、非文法的である。この Merchant (2003) の主張に対して、Culicover and Winkler (2008: 646) は、倒置文において、動詞句削除の適用は義務的ではないことを示し、比較倒置文 (CI) は SAI で導くことができない構文であることを論じている。

(17)a. MARY reads FRENCH much better than *does JOHN* [speak GERMAN].

b. MARY reads FRENCH much better than *does JOHN* [read GERMAN].

c. MARY is reading FRENCH (these days) much better than *is JOHN* [speaking GERMAN].

d. MARY is speaking FRENCH (these days) much better than *is JOHN* [speaking GERMAN].

(18)a. MARY would have translated the FRENCH much better than *would have JOHN* [translated the GERMAN].

b. *MARY would have translated the FRENCH much better than *would JOHN* [have [translated the GERMAN]]. (Culicover and Winkler 2008: 646)

(17) から、*than* 節内に動詞句が削除されずに残留する場合があることがわかる。同様に、(18a) から、複数の助動詞に主語が後続する倒置文においても、動詞句内要素が残留することがあることがわかる。Culicover and Winkler (2008) の観察に基づき、複数の助動詞に主語が後続する倒置文において、動詞句削除は義務的ではないことが示された。(16) と (17-18) を較べてわかることは、最初の節と *than* 節の動詞句が同じであれば削除されるが、主節と *than* 節の動詞句が異なり、対照強勢が置かれる動詞句は削除されないという、削除に課される同一性条件に基づく現象であるということである。削除されるのは、最初の節と *than* 節の動詞句が同じ記号連鎖の時である。違っている時には、削除が義務的に適用されることはない。これは、情報構造 (information structure) で課される制約、すなわち、旧情報・既知情報は、音韻上発音されないということを反映しているに過ぎ

ず、動詞句削除が義務的であるとする分析には問題がある。⁷

2. Culicover and Winkler (2008)の分析に対する検証

2.1. Wood 2008 : 2種類の so/so too 構文

Wood (2008: 2) では、so/so too 構文に2種類の統語形式があることが論じられている。すなわち、動詞句が削除される構文 (19a) と削除されない構文 (19b) があるとする分析である。

(19) Two syntactic forms:

a. *so* [AUX] [Subj] [VP]

b. *so* [AUX] [Subj] [VP]

(20)a. John plays guitar, but *so too does* Mary. (= John plays guitar, but so does Mary.)

b. Just as some children ignore their parents, *so too do* some parents ignore their children.

(= Just as some children ignore their parents, so do some parents ignore their children.)

(Wood 2008: 2)

(20a)が動詞句 play guitar が削除された構文で、(20b)は動詞句が異なることから削除されなかった構文である。Merchant (2003)とは異なり、動詞句が削除されない場合があることを指摘し、Culicover and Winkler (2008)と同様の分析が提案されている。⁸

2.2. Kim 2010 : 2種類の so 倒置文

Kim (2010: 3) は、SAIで導かれる so 倒置文 (SAI *so*-inversion) と焦点 so 倒置文 (focus *so*-inversion) の2種類の so 倒置文があり、後者の倒置文では複数の助動詞に主語が後続する倒置が許されること

⁷ Maeda (2021) は、Chomsky (2013, 2015) のラベリングアルゴリズム (labeling algorithm: LA) に基づく分析を提案している。すなわち、ラベル付けが決まらない可能性のある XP YP 問題を回避するために、動詞句削除が義務的に適用されるとする分析が提案されている。しかしながら、動詞句削除の適用が義務的ではないのであれば、LA に基づく分析には問題があるということになる。詳しくは、木村 (2021, 2022, 2023) を参照。

⁸ So は主語に対照強勢を置くという分析が、Huddleston and Pullum (2002: 1539) では提案されているが、この分析は、(i) のような文が存在することから問題であるとの指摘がされている。

(i) The Druze will continue as individuals to play their policing role, but *so will* they continue as a group to protect in indirectly through democratic channels. (Wood 2008: 2)

代名詞主語が許されている倒置文であることから、通常の SAI が適用されて導かれる倒置文であると分析することができる。もしこの分析が正しいとするならば、主語に対照強勢が置かれる必要はなく、(i) は Huddleston and Pullum (2002) にとって、何ら問題とはならないということができる。

を指摘している。

(21)a. The soldier wanted to protect his people, and so *could* we. (COCA)

b. Jimmy Carter would have been reelected, and so *would have* Dukakis. (COCA) (Kim 2010: 3)

Kim (2010) では、(21a) は SAI so 倒置文で、(21b) は焦点 so 倒置文であり、動詞句削除が適用されて導かれる構文であるとの分析が、さらに、(21b) は外置が適用されて導かれるとの分析が提案されている。⁹ また、Kim (2010: 11) では、主語に関して、so 倒置文の主語が代名詞である場合もあるが、複数の助動詞を伴う倒置文の主語は重い主語でなければならないことが指摘されている。¹⁰ Kim (2010: 6) は、随意的な (optional) 動詞句削除 (VP deletion) に基づく分析を提案している。¹¹

(22)a. The Druze will continue as individuals to play their policing role, but so *will* they [continue as a group to protect it indirectly through democratic channels]. (COCA)

b. Just as some children ignore their parents, so *do* some parents [ignore their children]. (COCA)

(Kim 2010: 6)

(23) Those days are long gone. And so *may be* the days of every 49ers home game [being on local television]. (COCA) (Kim 2010: 8)

(22–23) では、[] 内の動詞句表現が削除されることなく、残留している。このことから、Merchant (2003) の分析とは異なり、Culicover and Winkler (2008) が観察しているように、動詞句削除は義務的に適用されるわけではないということがわかる。¹²

⁹ “However, the Focus *so*-inversion construction is not a subtype of this SAI construction: we claim that it is syntactically a subtype of extraposition in which the heavy NP is located at the sentence final position, as represented in the following hierarchy” (Kim 2010: 13)

¹⁰ “As shown from the contrast here, the *so*-inversion can have a pronominal subject, but the auxiliary cluster prefers a ‘heavy’ pronominal.” (Kim 2010: 11)

¹¹ (22a) が focus so 倒置文ではなく、通常の SAI so 倒置文である可能性については、注8を参照。

¹² Kim (2010: 8) では、(ia, ib) や (iia) のように、主語に後続する助動詞の後の動詞句に動詞句削除が適用される (The VP ellipsis can even be applied after the post-subject remnant auxiliary.) ことが指摘されている。

(i) a. If one set is deemed socially (un) desirable, so *should* the other set be. (BNC)

b. And if this room was real, so *might* the others have been. (BNC) (Kim 2010: 8)

(ii) a. If you are tall and lean, so *should* your drawn image be. (BNC)

b. If the roles had been reversed, so *might have been* the treatment of reporters. (Time) (Kim 2010: 10)

この現象は、SAI so 倒置文に係わる現象で、助動詞に後続する動詞句に動詞句削除が適用されて導かれると分析することができる。複数の助動詞に主語が後続する焦点 so 倒置文 (iib) では、主語の後に助動詞が生じること

Kim (2010) の観察をまとめると, (24) になる。

- (24)a. SAIで導かれる so 倒置文と外置が関わる焦点 so 倒置文がある。
b. 焦点 so 倒置文では複数の助動詞に主語が後続することが許される。
c. 動詞句削除の適用は随意的である。

2.3. Park 2012 : 複数の助動詞に主語が後続する比較倒置文

Park (2012: 311–312) では, 比較倒置文 (CI) において主語が複数の助動詞に後続することが許されることが指摘されている。

- (25)a. Who was responsible for keeping the records would be a more reliable witness as to their accuracy as a whole than would be any of the original makers.
b. To her, thinking, as she ever was thinking, about Johnny Eames, Siph was much more agreeable than might have been a youngster man who would have endeavored to make her think about himself.
(Culicover and Winkler 2008: 630)

(25a) では would be に, (25b) では might have been に主語が後続している。

第二に, Park (2012: 312) では, CIは重名詞句転移 (Heavy NP Shift: HNPS) が適用されて導かれるわけではないということが指摘されている。

- (26)a. Ali would have driven a car to the park more eagerly than would have the students (in our class on environmental consciousness) to the concert. (Potts 2002)
b. Jim would have translated the English much better than would have students in his class read the Spanish.
c. John could have read French more fluently than could have Joe. (Park 2012: 312)

(26a) では動詞句内要素 to the concert が, (26b) では動詞句 read the Spanish が主語の後に生じている。また, (26c) に生じている主語 Joe は重くはない。

第三に, 後続する主語には, 対照的で焦点を担う句 (the phrase with contrastive focus meaning) spoken Englishが, その後に続くことが許される。(cf. (26b))

- (27)a. Megan can jump higher than could have Bill.

はない。詳しくは, 木村 (2021, 2022, 2023) を参照。

b. John read French more fluently than *could have* Joe spoken English.

(Culicover and Winkler 2008: 647, cf. Park 2012: 317)

(28)a. John might have eaten cookies faster than *might have* Paul made.

b. Mike wrote more books than *would have* John read. (Park 2012: 323)

このように、複数の助動詞が生じる時、その主語が助動詞と動詞句との間に生じることがある。このことは、Merchant (2003) の分析とは異なり、Culicover and Winkler (2008) が観察しているように、動詞句削除が義務的に適用されるわけではないということを示している。

第四に、nor 節や as 倒置や so 倒置には、2種類の倒置があり、i) SAIが適用される場合と ii) 焦点を伴う主語が複数の助動詞の後に生じる場合があることが指摘されている。

(29)a. Our man from Pernambuco had no inkling of this treachery, nor *would* he have given it his approval.

(COCA)

b. Edict 1 had been passed so long ago that most citizens of Spyre did not even know it existed, nor *would* they have understood its significance if it were described to them. (COCA)

(Park 2012: 326)

(30)a. A minor brawl between Arabs and Jews would have been nothing, nor *would have been* Israeli Arab demonstrators clashing with police in Arab townships, or Jewish settlers and Palestinians attacking each other's persons and property in the occupied territories. (COCA)

b. This harassment used the mechanisms provided by the research ethics industry on campus, and it seems likely that a private therapist would not have been such an easy target, nor *would have* a journalist. (BNC) (Park 2012: 326)

(31)a. Blair fell down the stairs, as *did* her brother.

b. John made his hair cut, and so *did* Tom. (cf. Culicover and Winkler 2008) (Park 2012: 327)

(32)a. Jane had been there, and so *had been* her boy friend.

b. Sandy would have been very angry, as *would have been* all of the people who invested in the project.

(Culicover and Winkler 2008: 652) (Park 2012: 327)

(29–30) は nor 節で、(31–32) は so/as 節である。(30) と (32) から、主語が複数の助動詞に後続する位置に生じることが許されることがわかる。(29) は、SAIが適用されて導かれる倒置文であり、複数の助動詞に主語が後続する倒置文とは異なり、代名詞主語が許される。(31) は単独の助動詞が関わる倒置文ではあるが、SAI で導かれる倒置文かあるいは複数の助動詞に主語が後続する倒置文である可能性がある。このことに関する判断基準は、代名詞主語を許すかどうかであり、代名詞主語

が許されるのであれば、SAIで導かれる倒置文であり、許されないのであれば、複数の助動詞に主語が後続する倒置文であると明確に区別することができる。

Park (2012) の観察をまとめると、(33)になる。

(33)a. 2種類の倒置文がある。

- b. 複数の助動詞に主語が後続することが許される。
- c. 主語の後置は重名詞句転移が適用されて導かれるわけではない。
- d. 動詞句削除の適用は随意的である。

2.4. Brueing (2015) : 2種類の倒置文

Brueing (2015) では、倒置文が、1) SAI が適用されることにより導かれる、助動詞と主語が倒置する倒置文と 2) SAIでは導くことのできない、複数の助動詞と主語が倒置する倒置文に分類されている。

(34)a. Yes-No Questions

Is Mary coming! (Emonds 1976: 21)

b. Tag Questions

Mary had come, hadn't she? (Emonds 1976: 27)

c. Negated Constituent Preposing

Under no conditions may they leave the area. (Emonds 1967: 28)

d. Conditionals

Had he done as he was supposed to, he would not be in this mess right now. (Brueing 2015: 2)

e. Fronted *So/As*

i) *The sun came out and so did the vacationers.*

ii) *The hotel had free wifi, as did the beach club, but it was very slow.* (Brueing 2015: 2)

(35)a. Comparative Substitution

More important has been the establishment of legal services. (Emonds 1976: 35)

b. Participle Preposing

Speaking at today's lunch will be our local congressman. (Emonds 1976: 36)

c. PP Substitution

Here will be the memorial to the war dead. (Emonds 1976: 37)

d. *So* Inversion

The results of education are long term and far reaching and so must be our commitment.

(Toda 2007: 189; cf. Brueing 2015)

e. *Nor Inversion*

I haven't been surprised by the rally, nor *should have been my readers*.

(Park 2012: 326; cf. Bruening 2015)

Bruening (2015: 12) は、複数の助動詞に主語が後続する倒置文の主語位置を明確に特定することはしていないが、SAIが適用されて導かれる倒置とは異なり、TPの指定辞ではなく、低い位置 (a lower position for the subject) にあるとの可能性を示唆している。

2.5. LaCara 2015 (cf. Potts 2002)

LaCara (2015: 220) は、複数の助動詞に主語が後続することを指摘している。^{13, 14}

(36)a. The US trade deficit could be an issue, as *could be the fact that much of China's economy is still fueled by exports*. (LaCara 2015: 220)

b. By the end of the trip, Klaus will have seen many bats, as *will have Eddie*. (Potts 2002: 640)

(36) から明らかなように、as 節において、複数の助動詞の後に主語が生じることがある。

¹³ (36b) は重名詞句転移 (heavy NP shift) が適用されて導かれた文ではないかという指摘に対して、この指摘を支持する証拠であるとして例示された文である。Potts (2002: 639) では、比較節と述語 as 挿入節において、主語と助動詞 do との随意的な倒置があるとの指摘がなされているが、(i) の文法性の違いに関して、何ら説明が与えられていない。

(i) a. Buzz has been flying longer than *has Chuck* (*been (flying)).

b. By the end of the trip, Klaus will have seen many bats, as *will Eddie* (*have (seen)).

(36b) が文法的であること、(i) の主語に助動詞が後続することが許されないことについての分析に関しては、木村 (2021, 2022, 2023) を参照。

¹⁴ 分詞前置と倒置を伴う as 挿入節の類似点の一つとして、LaCara (2015) では、主語が複数の助動詞の後に生じることが指摘されている。

(ii) a. The mayor will be speaking tonight, as *will be the Chancellor*.

b. *The mayor will be speaking tonight, as *will the Chancellor be*.

(ii) a. Speaking tonight *will be the Chancellor*.

b. *Speaking tonight *will the Chancellor be*. (LaCara 2015: 238)

類似点の二つ目として、LaCara (2015) では、助動詞に後続する主語には、焦点強勢 (focal stress) が与えられなければならないことが指摘されている。

(iii) a. Mary kissed a pig, as *will YOU*.

b. *Mary wants to kiss a pig, as *WILL she*.

(iv) a. Speaking tonight *is THE CHANCELLOR*.

b. ??Speaking tonight *IS the chancellor*. (LaCara 2015: 238)

2.6. Honda 2022

Honda (2022: 2) は、so/so too 倒置文の欠けた動詞句 (missing VP) は動詞句削除が適用された結果であるとの分析を提案している。(cf. Kim 2010) そして、この so/so too 構文を3つのタイプ (37) に分類する分析が提案されている。

(37)a. *So*-inversion with elliptical VP (e.g., So do I. / So does Mary.)

(i) Light *so*-inversion (e.g., So must {I/Ann} be.)

(ii) Heavy *so*-inversion (e.g., So must be {*I/Ann}.)

b. *So*-inversion with non-elliptical VP (e.g., So can Mary play the piano.) (Honda 2022: 2)

動詞句が削除されている so 倒置文と削除されていない so 倒置文があり、動詞句が削除される場合には、主語が重い場合と軽い場合があるという観察がなされている。

この3つに分類された so 倒置文に関するコーパス調査に基づく結果をまとめたものが、(38) である。

(38) The results obtained from the five sub-corpora:

(i) when a pronominal element such as *we, I, you, she, he, it, or they* occupies the subject position, the *so too*-inversion sentence strongly prefers the syntactic configuration of *so*-inversion with non-elliptical VP

(ii) when a non-pronominal element appears as the subject, the *so too*-inversion sentence prefers *so*-inversion with elliptical VP the most and *so*-inversion with non-elliptical VP the second-most

(iii) when the complex operator *so too* occurs in a *so*-inversion sentence, the *so too*-inversion only rarely takes the syntactic form of light *so*-inversion. (Honda 2022: 2–3)

So 倒置文の主語が代名詞の時は動詞句が削除されない場合が好まれ、主語が代名詞以外の時は動詞句が削除される場合が好まれる傾向にあることが指摘されている。この傾向は、Honda (2022: 5) によれば、焦点との関連が認められることが指摘されている。¹⁵ すなわち、so 倒置文には主語か述語に焦点 (additive focus) を置く機能があり、この結果として、主語に焦点を置く場合には動詞句が削除され、述語に焦点を置く場合には動詞句が削除されないことが選択されるという指摘である。Honda (2022) も、so 倒置文の派生には、随意的な動詞句削除が関わっているという分析を提案している。

¹⁵ *So*-inversion can associate its additive focus with either the subject or the predicate (or its sub-constituent). *So*-inversion may take at least two syntactic forms: one with elliptical VP and another with non-elliptical, full VP. (Honda 2022: 5)

また、(39) から明らかなように、so 倒置文に2種類の異なる特性を持った倒置文があり、主語が代名詞以外の時には、複数の助動詞に主語が後続する場合があることを指摘している。

(39) The light/heavy status of *so*-inversion depends on the information-structural property of the subject: when the subject is pronominal, it does not occur after the auxiliary cluster; when the subject is non-pronominal, it can follow the auxiliary cluster. (Honda 2022: 6–7)

Honda (2022: 7) は、Culicover and Winkler (2008) の分析に従い、2種類の異なる so 倒置文の派生には、外置 (extraposition) が関わっているとの分析が提案されている。^{16, 17} 主語が外置の適用を受けるときには、その主語は文末に位置し、代名詞以外の重い名詞句でなければならないとの分析が提案されている。Honda (2022) は、外置が関与する so 倒置文と関与しない倒置文 (one without the extraposition of the subject and the other with it.) があると主張している。

3. 結論

複数の助動詞を伴う倒置文の特性は、(40) として、まとめることができる。

(40)a. 主語が複数の助動詞に後続するとき、主語には対照強勢が置かれる。

(Culicover and Winkler 2008, Kim 2010, LaCara 2015, Honda 2022)

b. 複数の助動詞に後続する主語は、動詞句内にある。

(Culicover and Winkler 2008, Samko 2014, LaCara 2015, Maeda 2021)

c. 主語に後続する位置に動詞句あるいはその一部が生じることがあり、動詞句削除の適用は義務的ではない。

(Culicover and Winkler 2008, Wood 2008, Kim 2010, Park 2012, Honda 2022)

主語が複数の助動詞に後続するとき、主語には対照強勢が置かれる (40a) ことから、代名詞が生起することはない。(cf. Emonds 1976, Culicover and Winkler 2008, Honda 2022) 複数の助動詞に後続する主語は、動詞句内にある (40b) ことから、Park (2012) や Honda (2022) の主張とは異なり、重名詞句転移や外置が適用されて導かれることはない。主語に後続する位置に動詞句あるいはその一部が残される (40c) ことから、Merchant (2003) や Maeda (2021) の分析とは異なり、動詞句削除は随意的であり、義務的ではないといえることができる。

¹⁶ When the subject undergoes extraposition, it occupies the sentence-final position and must be a non-pronominal/heavy element. (Honda 2022: 10)

¹⁷ Honda (2022) は、Culicover and Winkler (2008) の外置に基づく分析に従うと主張しているが、Culicover and Winkler (2008) は外置に基づく分析を批判し、動詞句内の元々の位置に主語があるという分析を提案している。

参考文献

- Brueing, Benjamin. 2015. Subject Auxiliary Inversion. (to appear in *Syncom*.)
- Chomsky, Noam. 2013. Problems of Projection, *Lingua* 130, 33–49.
- Chomsky, Noam. 2015. Problems of Projection: Extensions, *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honor of Adriana Belletti*, ed. by Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann, and Simona Matteini, 3–16, John Benjamins, Amsterdam.
- Culicover, Peter W. and Robert D. Levine. 2001. Stylistic Inversion in English: A Reconsideration. *Natural Language and Linguistic Theory* 19, 283–310.
- Culicover, Peter W. and Susanne Winkler. 2008. English Focus Inversion. *Journal of Linguistics* 44, 625–658.
- Emonds, Joseph E. 1976. *A Transformational Approach to English Syntax: Root, Structure-Preserving, and Local Transformations*. New York: Academic Press.
- Honda, Masatoshi. 2022. A Corpus-Based Analysis of the Semantic Function of the Complex Operator *So Too* in *So*-Inversion, *Tsukuba English Studies* 41, 1–18.
- Huddleston, Rodney, and Geoffrey K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 木村宣美 2021. 「2種類の倒置文」『人文社会科学論叢』第11号, 27–51.
- 木村宣美 2022. 「複数の助動詞を伴う倒置文の派生」『人文社会科学論叢』第13号, 29–49.
- 木村宣美 2023. 「倒置文：連辞 *be* の語彙的特性に基づく分析」配布資料（名古屋言語学研究会（愛知工業大学），令和5年3月18日）
- LaCara, Nicholas. 2015. Discourse Inversion and Deletion in *As*-Parentheticals. In *Parenthesis and Ellipsis: Cross-Linguistic and Theoretical Perspectives*, ed. by Marlies Kluck, Dennis Ott and Mark de Vries, 219–245. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Maeda, Masako. 2021. Labeling in Inversion Constructions, *English Linguistics* 38, 91–105.
- Merchant, Jason. 2003. Subject-Auxiliary Inversion in Comparatives and PF Output Constraints. In *The Interfaces: Deriving and Interpreting (Omitted) Structures*, ed. by Kerstin Schwabe, and Susanne Winkler, 55–78. Amsterdam: John Benjamins.
- Park, Dong-Woo. 2017. An HPSG Approach to English Comparative Inversion. *Language Research* 53, 203–230.
- Potts, Christopher. 2002. The Syntax and Semantics of *As*-Parentheticals. *Natural Language and Linguistic Theory* 20, 623–689.
- Samko, Bern. 2014. A Feature-Driven Movement Analysis of English Participle Preposing. *Proceedings of the 31st West Coast Conference on Formal Linguistics*, 371–380.
- Toda, Tatsuhiko. 2007. *So*-Inverted Revisited. *Linguistic Inquiry* 38, 188–195.
- Wood, Jim. 2008. “*So*-inversion as Polarity Focus,” the handout delivered in the 38th Western Conference on Linguistics, 1–11, UC Davies.